

3章 UBEビエンナーレのミュージアムとしての機能強化プラン

3. 1 概要

UBEビエンナーレは、2012年（平成24年）の市民提言以降、「館」としての大規模な整備を行わずに内容の充実を図ってきた。結果、来場者数は回を重ねるごとに増え、27回展では10万人近い来場者を記録、また彫刻教育事業では、2016年度（平成28年度）は年間134回の授業で1万人を超える子供たちに教育機会を創出、2018年度（平成30年度）からは、UBEビエンナーレにAIR部門が設置され、彫刻や芸術でまちづくりを進めてきた海外都市との連携など、UBEビエンナーレにとって新しい局面を迎えつつある。

越後妻有トリエンナーレや瀬戸内国際芸術祭などアートによる環境づくり・まちづくりに世界中から注目が集まる中で、ときわ公園を彫刻ミュージアムとしてハード面からも整備し、ときわ公園全体の来場者が増えている中、世界からの注目に値する環境に整えていくことは、宇部市の都市間競争のプロモーションとして重要になってくる。

ミュージアムには大きく1) 作品の収集、2) 保存、3) 展示、4) 研究、5) 教育、6) 制作支援の役割があり、それら活動を支えるための環境整備が重要になる。

1) UBE ビエンナーレはビエンナーレのシステム自体が、作品収集の仕組みとなっており、プロセスが可視化されている「生きたミュージアム」であると言える。

2) 保存においては、寄贈を受けている作品や過去に収集している作品、半世紀分の貴重な資料や写真などに対して収蔵庫が圧倒的に不足しており、至急対策が必要である。

3) 展示に関して言えば、① UBEビエンナーレの実物展示 ② UBEビエンナーレの歴史的背景の展示 ③宇部市が所有する重要な彫刻コレクションの常設展示 ④彫刻やアートの新しい魅力を発信する企画展示 ⑤彫刻教育の成果の展示 ⑥UBEビエンナーレAIR 部門の展示 ⑦その他 UBEビエンナーレ作家の顕彰展示などが考えられる。これら複数の展示内容を同時に経験することで、UBEビエンナーレの広報・発信の効果が大きくなるが、現状では展示空間の不足や展示場所が分散していることなどからそれぞれ十分な質で展示ができていない。

4) 研究については、UBE ビエンナーレの新たな魅力を発見していく上で重要であるが、国内外の研究者や美術家の注目を集めるためにも常時内容の濃い展示が行われていることが重要になる。

5) 彫刻教育については、現状はギャラリー空間やライブラリーを一時利用する形でワークショップを行っている。兼用であるため、展示の質・量が保てない。場所の特性（キャラクター）を浸透させることができていない。限られた人員で運営していくことを考えるとワークショップルームは兼用せず、いつでもワークショップが開催できるような設えがあることが望ましい。

6) UBE ビエンナーレ本展の際には、ときわ公園に滞在しながら制作する作家もいる。それゆえに技術者や職人や学芸員など彫刻制作をサポートするノウハウやネットワークが蓄積されているが、滞在制作のためのスタジオなどは整備されていない。UBEビエンナーレ作家の現地制作時は、7月～8月に行われ、屋外での作業になるため、酷暑対策が喫緊かつ必須の問題であり、スタジオ（屋内作業場）は必須である。

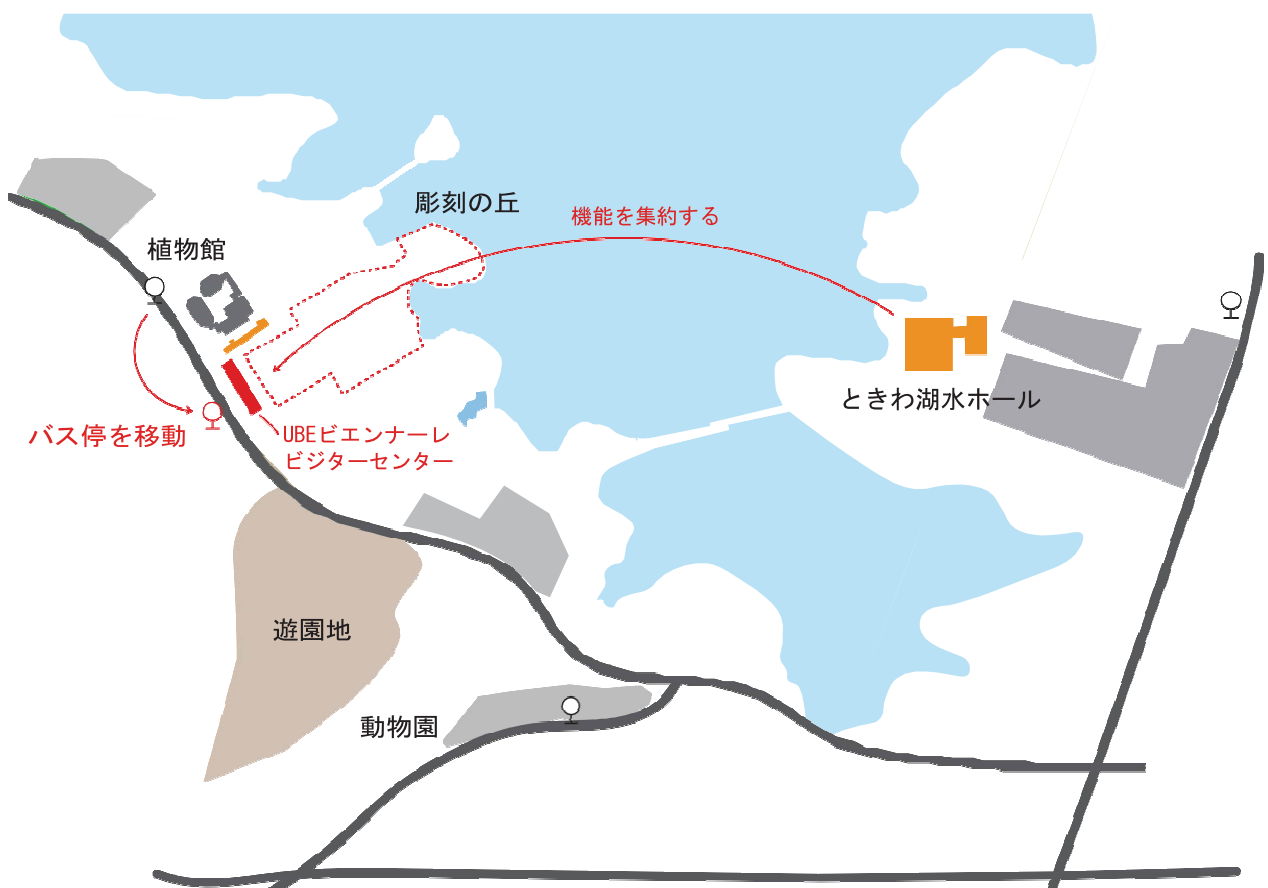
こうした「館」としてのハードの不足状況に対して、逐一对応した整備を行うことは大きな費用負担となるので、柔軟な運用によってカバーできる部分は集約化する「創造的なハード整備構想」を持つことが重要になる。

3.2 UBEビエンナーレミュージアム機能強化 プラン1

UBEビエンナーレ ビジターセンター整備プラン

<プランの内容>

- ・現在のUBEビエンナーレ彫刻の丘を中心に、彫刻ギャラリー、彫刻と常盤湖が見える展望カフェ、ワークショッブルーム、学芸員室、資料室、収蔵庫が一体として利用できるようにビジターセンター+彫刻ギャラリーを新設する
- ・隣接する道路からのアクセスルートを整備し、UBEビエンナーレ会場と植物館への顔となるエントランス空間をつくる
- ・「ときわミュージアム」の改築+新築として行い、既存建築の有効利用によって整備コストの低減を図る
- ・UBEビエンナーレ彫刻の丘と一体となった「展望カフェ」は、彫刻ギャラリー、ワークショッブルームと一体でデザインし、観光客誘致の目玉とする
- ・国内外の観光客に分かりやすくUBEビエンナーレを紹介するインフォメーション展示を多言語で行う（九州国立博物館やヒカリエで展開したようなものを常設で設置）
- ・彫刻ギャラリーは向井良吉や柳原義達などのゆかりの作家や重要なコレクションの常設展示、彫刻や美術の新しい流れを紹介する企画展示が同時に行えるようにする
- ・ラウンジ空間は、雨天時の彫刻教育の活動場所や、シンポジウム会場など多目的に使えるようにする
- ・ビジターセンターとUBEビエンナーレ会場の間には水盤などを設け、彫刻作品展示の際の背景として機能するように整備する。
- ・隣接する道路側に駐車場を設け、また駐車場からのアクセスもスロープなどによってユニバーサルで開かれたデザインとする



1、ときわ公園の地形に溶け込むビクターセンター

ときわ公園の豊かなランドスケープに溶け込むビクターセンターとする。
彫刻の丘のゆるやかな地形に沿った空間構成を計画し、来訪者の彫刻の鑑賞動線と、市民のワークショップやカフェ利用の動線が調和するビクターセンターをつくる。



彫刻の丘からの見え方



眺望カフェからの見え方

1 ビエンナーレ展示会場の機能を強化する

現在の UBE ビエンナーレ 彫刻の丘を中心に、彫刻ギャラリー、彫刻と常盤湖が見える展望カフェ、ワークショップルーム、学芸員室、資料室、収蔵庫が一体として利用できるようにビクターセンター+彫刻ギャラリーを新設する。

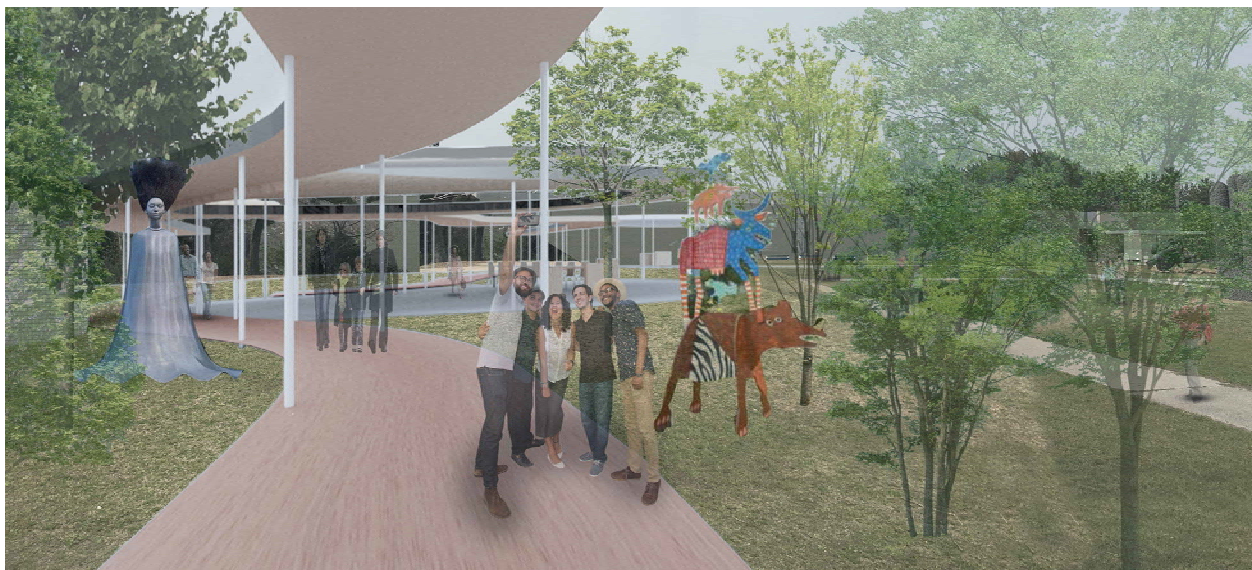
2 来訪者を迎えるエントランス空間

隣接する道路へのバス停の移動や駐車場の整備と共に、道路からのアクセスルートを整備することで、UBE ビエンナーレ 会場と植物館への顔となるエントランス空間をつくる。

3 改築+新築による整備コストの低減

現在 UBE ビエンナーレ ライブラリーと休憩所として利用されている「ときわミュージアム」部分の改修+新築として計画を行い、既存建築の有効活用によって整備コストの低減を図る。





森の回廊からの見え方



近接道路からの見え方

4 誰でもつかいやすいビクターセンター

隣接する道路側からのアクセスをスロープなどによってユニバーサルで開かれたデザインとする。

施設の各所に休憩できるスペースを配置する。また、インフォメーションに近接してキッズルームを配置する。

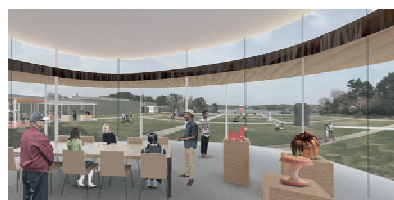
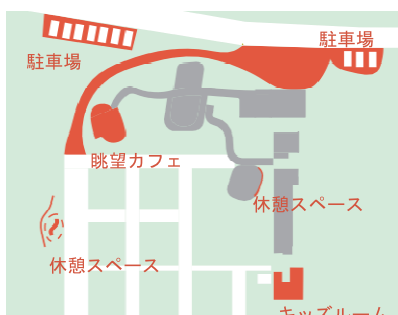
5 交流がうまれるビクターセンター

公園散策にきたひとがアートに触れることができ、公園を日常的に訪れる地元の人々も自然にビクターセンターに立ち寄ることができる。

また、眺望カフェをギャラリーやワークショップルームから独立して運営できるようにする。公園利用者が気軽に訪れることができ、公園の風景を望む憩いの場となる。

6 天候に影響されずいつでもつかえる

眺望カフェやギャラリー、森の回廊といった彫刻の丘に開いた屋根下空間を充実することで、天候に影響されずに、雨の日でも楽しむことができる。



2、森の回廊がつなぐビジターセンター



参考事例

1、森の小道



セゾン現代美術館

2、森の回廊



ルイジアナ美術館

3、眺望カフェ



スターバックスコーヒー富山環水公園店

4、水盤広場



府中の森公園

5、ワークショップルーム



長崎県美術館

6、バス停



Alexander Brodsky' s BUS:STOP

7、キッズルーム



8、遊具彫刻エリア



彫刻の森美術館

3.3 UBEビエンナーレミュージアム機能強化 プラン2

UBEビエンナーレ レジデンススタジオ整備プラン

<構想の内容>

- ・現在のときわ湖水ホール「アートギャラリー」「収蔵庫」を改修し、UBEビエンナーレ本展の設置期間中、作家の現地制作のための場所として、アーティストが滞在制作を行えるレジデンススタジオと道具室を整備する
- ・レジデンススタジオは、天井の高い大スタジオと、天井の低い小スタジオを設ける
- ・大スタジオには大きな材料を搬入するためのホイストクレーンなども設置する
- ・将来的には裏庭に塗装を行うペインティングスタジオも設置する
- ・スタジオは制作風景が見学できるようにデザインする
- ・彫刻教育のワークショップでも活用できるように道具室の充実化を図る





■大スタジオのデザイン事例



University of Bergen



武蔵野美術大学

■小スタジオのデザイン事例



University of Bergen



武蔵野美術大学



University of Bergen

1、アーティスト・イン・レジデンスの制作スタジオの事例

ARKO (Artist in Residence Kurashiki, Okayama) 岡山

大原美術館によるアーティストのレジデンスプログラム。「若手作家の支援」「大原美術館の礎を築いた洋画家児島虎次郎の旧アトリエ：無為村荘の活用」「倉敷からの発信」の3点をコンセプトに、滞在制作と、完成作品の大原美術館での公開をおこなっている。



京都芸術センター 京都

2000年から実施されている芸術家や芸術分野の制作者・研究者等が、一定期間、京都に滞在しながら創作活動や交流を行うプログラム。新進又は若手のアーティストや芸術分野の研究者等を、ビジュアル・アーツとパフォーマンス・アーツの分野から隔年で募集している。



秋吉台国際芸術村 山口

レジデンス・サポート・プログラム（通称：trans_）は、アーティストたちにとってその後の活動のための実験の場であり、新しい体験の場となることを目指している。アーティストは、創作活動を通じて新しい発想や視点を地域にもたらすだけでなく、その成果発表やアウトリーチなど地域交流プログラムを積極的におこなうことが求められている。



Arcus 茨城

1994年に開始したアーカスは、国際的に活動するアーティストが滞在制作を行うアーティスト・イン・レジデンスプログラムと、地域の方々が主体となって関われる場づくりやワークショップ等の地域プログラムを展開している。アーティストに長期滞在用の住居とスタジオなどを提供することで、創作活動を支援し、同時に地域の方々との交流の機会をつくる。



Art-Space TARN 奈良

天理市本通り商店街内の空き店舗をリノベーションして生まれた民間アートスペース。アーティスト・イン・レジデンスにより制作された作品の展覧会が行われるほか、ワークショップのフィールドとしても活用される。



Studio KURA 福岡

民家の米蔵をアーティストのスタジオとして開放したアーティスト・イン・レジデンス。アーティストは、一ヶ月の間、このスタジオで制作し、最後にその成果を発表する。期間中はオープンスタジオとして開放し、誰もが制作風景を見学することができるようにしている。



2、アーティスト・イン・レジデンスの滞在スペースの事例

ヴィラ九条山 京都

フランス日本研究所の5つの機関のうちの1つであるヴィラ九条山は、5つの中で最も権威のあるレジデンスプログラムを実施している。日本でのプロジェクトを実施するアーティストのために25年間にわたり優れたプログラムを提供してきている。毎年15人程度が短期、長期のプログラムを実施。



PARADISE AIR 千葉

千葉県松戸市に位置し、パチンコホール楽園の協力により、かつてホテルだったビルを活用して運営されている。かつての松戸宿の歴史伝統をふまえた「一宿一芸」をコンセプトとする。現在は、短期滞在のアーティストだけでなくキュレーターやリサーチャーらを受け入れる「ショートステイ・プログラム」、公募によって選出されたアーティストの渡航・滞在・作品制作を3ヶ月間フルサポートする「ロングステイ・プログラム」、アーティストと地域をつなぎ多様な学びと交流を促す「ラーン・プログラム」の3つを軸として活動をおこなう。



黄金町アーティスト・イン・レジデンス 神奈川

国内外のアーティストや工芸家、デザイナー、建築家など、クリエイティブな分野で活動されている人を対象としたアーティスト・イン・レジデンス。まちと一体化した環境で滞在や制作、発表ができる。また地域コミュニティの中に散在し、同時に多数のアーティストがレジデンスを行なうことが特徴となっている。



MORIUMIUS 宮城

日本大震災の津波で壊滅的な被害を受けた宮城県石巻市の雄勝町で、木造校舎を宿泊施設に修復、再生して2015年7月に完成したこの校舎は、2002年に閉校するまでの約90年間で、約500人の卒業生を送り出した町のシンボルであった。こども向け複合型体験施設「MORIUMIUS」を拠点に、作品制作だけでなく、MORIUMIUSに滞在する子供向けにワークショップを実施するなど、教育プログラムとしての側面をもつ。



3、アーティスト・イン・レジデンスの滞在・制作の事例

神山アーティスト・イン・レジデンス（KAIR） 徳島

1999年からスタート。毎年8月末から約2ヶ月余りの期間、日本国内および海外から3名～5名のアーティストが神山町に滞在。作品を制作し、毎年10月下旬から作品展示会を開く。希望により滞在時期や期間を設定でき、KAIRを通じて培ってきた制作支援環境のもとでの滞在制作が可能。「ベッド&スタジオ プログラム」は、滞在を希望する個人やグループに、期間・規模・テーマに応じた最適な宿や制作スタジオをNPOが無償で紹介。



青森国際芸術センター（ACAC） 青森

2001年12月に開館。国内外のアーティストを招聘し、一定期間滞在しながら創作活動を行うアーティスト・イン・レジデンス・プログラムを中心事業とした施設。年に2回、推薦型と公募型によって行われ、各プログラムとも約3カ月間滞在し、活動が行われる。



滋賀県立陶芸の森 AIR 滋賀

滋賀県立陶芸の森が運営するアーティスト・イン・レジデンス。1992年の開館以来、世界各国から陶芸家を受け入れ、信楽の地で自由に作品を制作する機会を提供している。常時10人前後の陶芸家が滞在し、交流を深めつつ、創作を行う。公募型のスタジオ・アーティストと、陶芸の森が招聘するゲスト・アーティストの2つの枠がある。



瀬戸国際セラミック&ガラスアート交流プログラム（AIR） 愛知

国外の優れた陶芸家とガラス作家を招聘するアーティスト・イン・レジデンス。瀬戸の長い陶芸の歴史とガラスの原材料（珪砂）の産地である特質を生かし、陶芸・ガラス芸術の新たな展開が生まれることを試みる。市民や瀬戸市および周辺地域で活動する作家等との交流を深め、芸術的感性と国際感覚豊かな地域づくりを目指している。



遊工房アーツスペース 東京

東京・杉並で非営利の芸術文化活動を展開している「遊工房アーツスペース」が運営するアーティスト・イン・レジデンス。緑豊かな東京都内の住宅地域にあり、最長6カ月の滞在制作を原則とし、アーティストが中心となり独自に運営する。国内のアーティストや美術大学との協働活動も活発に行い、情報交換や交流の機会になると共に、国内アーティストに、海外への飛躍の機会を意識したネットワーク活動を推進している。

